EL-Online（改）

アルタイル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＥＬ－Ｏｎｌｉｎｅ（改）

【Ｎコード】
Ｎ２８０２Ｙ

【作者名】
アルタイル

【あらすじ】
レッドカラー、そう呼ばれる存在であるがゆえに戦いを禁じられた少年。彼は戦いを求めて幼馴染とともに、世界初のＶＲＭＭＯであるＥＬ－Ｏｎｌｉｎｅのβテスターになった。しかし、そうして訪れた仮想世界はすぐに恐るべきデスゲームと化して――！　天を模して造られた世界と狂信的な運営。密かに選ばれていた１５００人のテスターたち。すべてが破滅へと歩みを進める中、少年は加速しながら刀を振るう――。
※ＥＬ－Ｏｎｌｉｎｅの改訂版です。

プロローグ

果てしなく広がる荒涼とした大地。かつて霞ヶ浦と呼ばれた湖だったそこは、今はその面影すら感じられぬほど乾ききっていた。直径数十キロにも及ぶ広大極まるこの荒れ地には樹木すらまばらで、さながら砂漠のようですらある。

その荒れ地の中心地に、巨大な都市が聳えていた。見事な円形を描くその都市は砂漠に浮かぶ島のようで、中には高層ビルが押し込められたようになっている。周囲の寂しさからはおよそ想像もつかぬほど煌びやかな都で、輝くガラスやビーズをばらまいたようだ。

されど、都市は高い壁で守られていた。周囲の物を一切拒むかのような、高い高い壁。それは見上げれば上が霞んでしまうほどで、人が上ることなど不可能に思えるほどだ。さながら天地の境目のようなこの壁でもって、都市は周囲からほぼ完璧に遮断されている。

だが、その壁には巨大な扉が付けられていた。そこへ向かって、まっすぐな一本道が通っている。外界と都市との唯一のつながり。そんな道を、黒いバスが何台も車列をなして疾走していた。バスの車体には紅い文字で「Ｍａｒｄｏｃｋ　Ｂｒａｉｎ」と書かれている。

「ここが美玖波か」

揺れるバスの車内で、一人の少年がつぶやいた。彼の手には「ＥＬ－Ｏｎｌｉｎｅ　βテスター当選通知」と書かれた紙が握られている。彼はその紙と車窓から見える景色を見比べながら、どこかわくわくしたような顔をしていた。

そんな彼の隣には一人の少女が腰かけていた。つややかな黒髪を肩まで伸ばした、古風な雰囲気のある少女だ。彼女はその凛とした眼を緩ませると、隣の少年に話しかける。

「直人、楽しそうだな」

「そりゃそうさ。環だって、楽しみにしてたんだろ」

「もちろん。ゲーマーの憧れだぞ？　楽しみでないわけないじゃないか」

環はそのはちきれてしまいそうなほどの胸をドンと突き出した。その顔は誇らしげで、希望に満ちあふれている。それも当然かもしれない。彼女たちは世界中の人々が憧れる夢の切符を手にして、今まさに理想郷へと赴こうというのだ。希望を感じていないわけがない。

少年こと直人もそう思ったようだ。彼は「そうだよな」と一言つぶやくと、また視線を車窓へと移す。その眼は夢を見ているようで、顔はどこかうっとりとしている。まるで熱に浮かされたようだ。そんな彼は遠くを見ながら再び薄く唇を開く。

「……あそこに行けば、もう一度刀で戦えるんだよな？」

「当たり前だ。一度どころか幾らでも戦えるぞ」

環の言葉に、直人はわずかながらほっとしたような顔をした。わかりきっていたことではあるが、彼は確かめずには居られなかったのだ。戦えるかどうかを。それほどまでに彼は戦いを求めていた。

いや、正確には戦いに飢えていたというのが正しいか――。

こうして直人がほっとしたような顔をすると同時に、チャイムのような音が流れてきた。直後、ポンと音がして車内アナウンスが始まる。

『まもなく美玖波学術特区内へと入場いたします。特区内へと入場しますと、約三分ほどでマルドゥック・ブレイン本社です。皆様、いまのうちにお忘れ物がないよう、荷物をまとめてください』

アナウンスに従い、素直に荷物をまとめ始める直人と環。二人がそうしている間にも、バスの車列は巨大な門の隙間を潜り抜けた。たくさんの人々の夢や希望を乗せて――。

第一話　レッドカラーの少年

今から約一週間前の七月半ば。暑さのあまり人影もまばらな道場で、直人は一人、黙々と竹刀を振るっていた。竹刀の切っ先は先ほどから寸分たがわぬ直線を描き、心地よい風切り音を響かせる。同時に踏み込む足も、板敷きの床を気迫とともに激しく揺らす。その動きは流麗で、隙も無駄もほとんどない。少年の実力は相当な物のようだ。

だが、そんな直人を見ている何人かの門下生の視線は、決して尊敬の意味合いなど含んではいなかった。憐れみとかすかな侮蔑。彼らの視線に含まれる感情はほとんどそれだけである。なぜなら直人がどれだけ努力しようと、どれだけ強くなろうと、活躍の場が与えられることなどないのだ。直人は『レッドカラー』なのだから。

いまから三年前、直人が十四歳の冬。突如として彼はレッドカラーであると発覚した。以来、三年間にわたって彼は公式試合どころか練習試合への出場も禁止されている。それどころかそれまでに得た段位も、勝ち得てきたトロフィーなどの栄光もすべて彼は奪われていた。レッドカラーとは、それほど大きな意味を持つ言葉であったのだ。

だが、彼は剣道をやめることはなかった。剣を振るうのが好きだったから。心のどこかにもう一度戦えるかもしれないという希望を抱いていたから。ただそれだけの理由である。ゆえに直人は今日も竹刀を振り続ける。もう、戦いへの渇望は満たされることがないとうすうす感じながら――。

夕方、生ぬるい風が僅かながらも冷たさを帯びてきたころ。ようやく直人は竹刀を振るのをやめた。彼は渇いたのどを潤すべく水筒を取りに向かう。夕陽に影を差しながら、彼は道場の隅に置いた荷物へと歩く。その時、彼の視界に青い何かが飛び込んできた。彼はそれをとっさに手で受け止める。不意に、しかもかなりの速度で投げられた物体をいともたやすく。

そうして受け止めてから、彼は軽い自己嫌悪に駆られた。この『常人を少し超えた』動体視力こそ、彼がレッドカラーとされている理由だった。ゆえにそれを使ってしまったことに、言いようもない不快感を覚える。彼はハアっと息をつくと、投げられてきたペットボトルを床に置いた。そしてペットボトルが飛んできた方向を見る。するとそこには、見知った幼馴染の顔があった。

幼馴染こと環は『自家発電』で音楽プレイヤーを聞いていた。文字通り身体から電気を出して、音楽プレイヤーを充電しているのだ。そのレッドカラーのゆえんたる力を隠そうともしない態度に、直人は何となく自分とは違うと感じる。嫌悪などではなく、あくまで違いを感じるだけだが。

そうして直人が微妙な顔をしていると、環はイヤホンを外した。彼女はそのまま直人にゆっくりと近づいてくる。

「久しぶりだな、直人」

「何か月ぶりだ？」

「おいおい、まだひと月もたってないぞ。ま、この道場で会うのは

中学以来だろうが」

環と直人は中学まではこの道場で共に修行している仲だった。だがレッドカラーであることが判明して以来、環は道場を辞めている。道場に残った直人と去った環。そのことがきっかけでなんとなく気まずくなった二人は、今では少し疎遠になっていた。以前は毎日のように互いの家へ出かけていたのが、今ではひと月に一度出かければいい方である。

そんな環が、なぜ直人に会いに来たのだろうか。しかも二人にとってはタブーとも言える場所であるこの道場へ。直人はスッと眼を細め、環を睨んだ。すると環は、その揺れんばかりの胸元から手紙のようなものを取り出す。

「フフッ、今日はこれを直人に届けに来た」

「なんだこれ？　……って、これどうやって手に入れたんだよ！」

紙にはＥＬ－Ｏｎｌｉｎｅのβテスター当選通知と書かれていた。直人はそれを見て眼を丸くする。

ＥＬ－Ｏｎｌｉｎｅとは、マルドゥック・ブレイン社が発表した世界初のＶＲＭＭＯのタイトルである。仮想現実技術を使い五感のすべてを体感できるということで、世界を騒がせているゲームだ。その話題性たるや、ゲーム関連のネット掲示板が過負荷でサーバーダウンを起こすほどである。

そのＥＬ－Ｏｎｌｉｎｅのリリースに先立ち、夏休み期間にマルドゥックの本社に泊まり込みで約一ヶ月間のβテストが行われることになっていた。当然、そのテスター枠には応募が殺到し、宝くじ

並みの倍率を勝ち抜かなければテスターにはなれないはず……なのだが。強運な環は見事テスターになる権利を勝ち得たようだ。

「二人分応募して置いたら当たってたんだ。どうだ、一緒にプレイしないか？」

二枚の当選通知を見せびらかして、ニヤッと笑う環。その顔は自信満々だ。それもそうだろう、直人ぐらいの年頃の人間たちにはあこがれの当選通知なのだ。だがそれに対して、直人は少々申し訳なさそうに顔を下に向けた。彼の唇が薄く開かれ、ぼそぼそと言葉が紡がれる。

「ごめん、せっかくだけどやめとく。お前一人で楽しんでこいよ」

「つれないなあ、こーんな美少女が誘ってるっていうのに」

「……お前、見た目は最高だけど中身は半分男じゃないか」

シャツが裂けそうなほど膨らんだ胸を寄せて色っぽい顔をした環を、直人は斬って捨てた。女や胸に興味はある……というより両方とも大好きな直人だが、環は別だ。そのガサツすぎる本性を彼は知りすぎていた。もっとも、環が本気だというなら相手をすることもやぶさかではないだろうが。

「くッ、相変わらず失礼な奴だ。こう見えて私はモテモテなんだぞ？　……まあ、そんなことは置いといて。ＥＬ－Ｏｎｌｉｎｅでは刀を使って戦うこともできるんだが、それでも嫌か？」

「……！！」

薄くなっていた直人の眼が見開かれた。彼は環の手から驚異的な動作で当選通知を奪い取ると、食い入るように見つめる。その表情は、どこか虚無感の漂っていた先ほどまでとは違って、活力に満ちていた。そう、レッドカラーだと告げられる以前の彼のように。

「ククッ……」

彼の口から、かすかに音が漏れた。その空気音は段々と大きくなっていく。そして――

「……ハハハッ、わかった！　ＥＬ－Ｏｎｌｉｎｅをやるぞ！」

少年の叫びが、人気のない道場にこだました。

第二話　説明会と少女

天空に螺旋を描くビル。さながらガラスの塔のようなそれは、陽光を反射しながら蒼空に聳える。その頂は雲に突き刺さり、霞んで見えるほど。周囲に林立する高層ビル群と比べても、その高さは頭一つ抜けていた。

そのビルの足もとに当たる部分に、直人と環はいた。バスから降りた二人は、他のテスターたちに混じりながらキョロキョロと落ちつかない様子であたりを眺めている。右へ左へ、二人の視線が次々と揺れ動いた。

「すごいな」

「ああ……」

辺りは見慣れぬもので一杯だった。二人の周りには重なり合う流線型のビルの群れが広がり、すっかり空を狭くしてしまっている。その谷間を、人々が見慣れぬスケートボードのような乗り物に乗って縦横無尽に翔けている。さらにビルの壁や空中には無数の空間ディスプレイが浮かび、色とりどりの光を投げかけていた。二十一世紀も後半に差し掛かっていたが、このような街は他に存在しない。

しかし、直人はこの街に違和感を覚えた。どこか行きすぎているような、ここにあってはいけないような……そんな感じがするのだ。

――まるで時代にそぐわないオーパーツだな――。直人はとっさにそう思った。彼は少し顔をゆがませると、眼を細める。

そうしていると、手前のひと際高いビルの方から甲高い声がした。直人たちが振り向くと、ビルの入口にガイドらしき女性が何人か立っている。彼女たちは小さな旗を振りながら、直人たちを精一杯呼んでいた。

「みなさま、こちらですよ！」

ガイドたちの言葉に、三々五々集まるテスターたち。数十台ものバスの周りから次々と人が集まってきて、たちまち辺りは大混雑した。さながら通勤時のプラットホームのようだ。テスターたちは千五百名にもなる大所帯。こうしてラッシュアワーさながらの人混みができるのも無理はない。

二人はそんな人ごみの中心を避けると、やや離れた位置に陣取った。そこから少し背伸びをして、彼らはガイドたちの動きをうかがう。幸いガイドたちはマイクを使用していたので、声を聞き取ることに不自由はなかった。

直人はそうしてガイドの話を聞きながら、周囲の人々にも眼を走らせた。これから一ヶ月間をともにすごすことになるテスターたち。彼らについて、直人は多大な興味を抱いていたのだ。彼はガイドの話もそこそこに、鋭い観察眼を周囲の人々に向けて発揮する。

すると彼の眼に、かなり風変りな男の姿が飛び込んできた。ひょろりとした背の高い男で、何となく風采が上がらない。服装はセンスの古いコートにサングラスと、一昔前のハードボイルド風だがまったく似合っていない。しかし、問題はそこではなかった。

「レッドカラー？」

男はいまどき珍しい煙草に『指先で』火をつけていた。指先だけで器用にライターを使ったとかではなく、体から炎を出して。これは間違いなくレッドカラーにしかできない芸当だ。されど、直人は思う。レッドカラーが自分たちも含めてこの場に三人も居るのはおかしいと。

「なぁ、環」

「ん、なんだ？」

「あの男、レッドカラーじゃないか？」

直人はさりげなく視線で男を示した。環は男の方に眼をやるとそうだなとばかりにうなずく。だが、その顔はどこかめんどくさそうであった。

「そうみたいだな。だけど、それがどうかしたか？」

「いや、レッドカラーが三人も集まるなんて珍しくないかと思って……」

「それはそうだろうが……。別に大したことじゃないだろう」

環はうんざりしたように言うと、ガイドの方に視線を戻した。直人もまた、それにつられて彼女と同じ方向に視線を向ける。心のどこかにひっかかるものを感じながら――。

夕刻、ビルが黄昏に染まるころ。直人たちはひとしきりマルドゥック・ブレインの本社を案内された後で、広いホールに集められていた。映画館のようなホールで、千五百人のテスターたちが入ってもまだゆとりがある。直人と環はその座席の前の方に腰かけると、正面につけられているディスプレイを見た。それと同時にブザーが鳴り響き、ディスプレイが光を帯びる。照明が暗くなり、あたりはにわかに闇に落ちた。

瞬間、光が砕けた。ガラスが砕けるような映像が流れ、直後、壮大な音楽が流れ始める。幅十メートルはあろうかという巨大ディスプレイに、華麗にして壮大な風景が映し出された。百花繚乱の野原、空にゆたう大陸、星が降り注ぐような平原……。荘厳な自然やそこに生きる人々の美しい姿が次々と絵巻のように流れていく。直人も環もその圧倒的な映像美に目を奪われた。

その映像の最後にＭａｒｄｏｃｋ・Ｂｒａｉｎと会社名が大きく映し出され、同時にロゴが浮かび上がった。黒地に紅で、仮面を模したような物が描かれたロゴだ。かなり陰鬱で、呪術的な物を思わせる。企業のロゴにはあまりふさわしくないように思えた。

直人はあまり趣味の良くないロゴに眉をひそめた。だが一方、環は眼を輝かせる。その顔は興奮する少年のようだ。それを見た直人は環がとある病を患っていたことを思い出し、苦笑する。中学はとっくに卒業していたが、まだその病気は治っていないようだった。

そうして直人と環が過ごしていると、明るくなったステージの上に男が上がってきた。デザイナーズスーツをパリッと着こなした、出来る男の見本のような男。だが、そのまだ四十前後とみえる若々

しい顔には黒い影がちらほらと見え隠れする。直人はそんな男を見て、ゲームの責任者か何かだなと思った。

「こんにちは、私はマルドゥック・ブレイン社代表取締役の黒柳です。このたびはわが社の新製品、ＥＬ－Ｏｎｌｉｎｅのβテストにご参加いただき誠にありがとうございます」

男の挨拶に、ワッと拍手が鳴った。会場全体にバチバチという音が響き渡り、何やら声まで上げている者もいる。ステージ上の黒柳はそんなテスターたちに、にこやかに笑いかけながら話を続けた。

黒柳の話はそのほとんどが事務的な連絡とＥＬ－Ｏｎｌｉｎｅのごくごく基本的な説明に終始した。いずれも事前に渡されたパンフレットに載っているような内容ばかりであり、目新しいものはさほどない。さすがに一流企業の代表を務めるだけあって、人を引き付けるような話し方をする黒柳であったが、内容が内容だけに直人は話の後半部分をほとんど聞いてはいなかった。それは環も同様なようで、直人の耳にすやすやという寝息が聞こえてくる。

こうして直人があくびをした時。突如として黒柳の話のトーンが上がった。その音程の変化に、直人は眠そうな目をこすってステージに注目し、隣の環もあくびをかましながら起き上がった。二人はそのまま、熱弁をふるう黒柳へと視線を集中させる。

「では最後にＥＬ－Ｏｎｌｉｎｅ開発チーム主任、神流からのあいさつです！」

黒柳がひどく仰々しい態度でステージの袖の部分を示した。ゲームの開発者を迎え入れるべく、テスターたちから盛大な拍手が巻き起こる。ＥＬ－Ｏｎｌｉｎｅの開発者については今まで、その一切

が謎に包まれていた。それが明らかになるとあって、会場の興奮は尋常ではない。広いホールの中はさながらスタンディングオベーションのような状態だ。直人と環もそれに巻き込まれるような形で拍手を送る。

その嵐のような音量と会場中の注目の中に、小さな人影が現れた。ひどく細く華奢な印象のその人影は、まっすぐにステージ中央へと向かっていく。その姿に、拍手がにわかにまばらとなった。直人と環も驚きのあまり目を丸くする。

幼い、あまりに幼すぎたのだその人物は。見たところ、十代前半ぐらいの少女にしか見えない。ＥＬ－Ｏｎｌｉｎｅの開発主任どころか、社会人になっていることすら不思議なように思われる。

「環、あれってもしかして……」

「いやまさか……」

どよめく客席、響く疑問。そんな中で渦中の少女は何事もないかのように平然とステージ中央にたどり着いた。彼女はちょっと背伸びをしながらマイクの高さを調整する。そして、ひどく無機質かつ事務的な口調で告げた。

「みなさんこんにちは、私が神流です。私から皆さんにお伝えしたいことはただ一つ……」

長い沈黙があった。時がゆったりと、凍りついたように流れる。会場にいた誰もが、思わず動きを止めて息をのんだ。そして――

「このゲームをプレイしないでください」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2802y/

EL-Online（改）

2011年11月9日01時09分発行